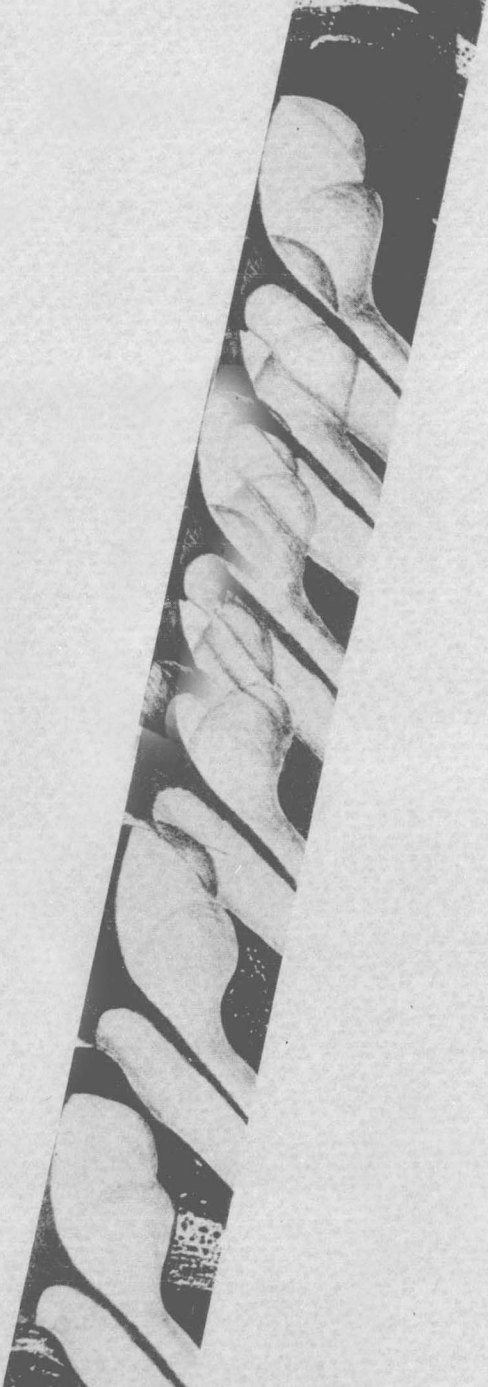
浦島草

大庭みな子

大庭みな子



浦島草（うらしまそう）

昭和五十二年三月二十二日　第一刷発行
昭和五十二年四月二十日　第二刷発行

著　者　大庭みな子

発行者　野間省一

発行所　株式会社講談社
東京都文京区音羽二―一二―二一
郵便番号　一一二
電話　東京（〇三）九四五―一一一一（大代表）
振　替　東京八―三九三〇

印刷所　信毎書籍印刷株式会社

製本所　黒柳製本株式会社

落丁本・乱丁本はお取り替えいたします。
©大庭みな子　昭和五十二年

Printed in Japan　定価はカバーに表示してあります。　（文1）

目次

よのみ鳥 7
白いかわうそ 41
浦島草 89
やなぎ 159
すいかずら 211

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook

月の蠟燭 269
蜃気楼 305
ありの実 341
春雷 379
けむり 417

装画／池田満寿夫

浦島草

よのみ鳥

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook

そのとき、雪枝は見知らぬ初老の男に肩を叩かれた。雪枝の中にある森人兄(もりとあに)の記憶は、とてもあやふやなもので、十数年ぶりに森人に会っても、人混みの中で彼を見分ける自信はなかったから、あらかじめ自分の写真を彼に送り、同時に、自分のほうでも昔のアルバムの中から得られるだけの彼の写真を集めて、その特徴を思い出そうとした。

森人は長兄の洋一にくらべるとずっと母に似ていたし、したがってそれは自分に似ているということであったから、血縁の不思議さで、なんとかなるだろうとは考えていた。雪枝はそうした断片的な記憶を掻き集めながら、森兄の、——雪枝は森人兄さんという代りに、短かく森兄さんと子供の頃言っていた、——彼の顔を人波の中にいっしんに探していて、近づいて来たその初老の男を無視した。だが、それが森兄だったのだ。

彼はおだやかに笑いかけた。すると、そのおだやかな光の奥から、見覚えのあるゆらめきがみるみるうちに大きくなって近づいて来た。口元も、声も、確かに非常に近い肉親、聞き覚えのある洋一のそれに似ていた。彼は母よりも今ではむしろ洋一に近かった。

何という変りよう——。彼は、醜くぶよぶよにふくれて黴の生えたパンみたいだった。かつてたくましく筋骨の盛りあがっていた肩も胸も、ただしまりなくむくみ、あの黒ぐろとした硬い髪は影も形もなくかき消え、代りに、風に吹かれる寸前のたんぽぽのような軽い白い毛がふ

わふわと漂う下で、禿げあがった額ばかりが妙に深みのある鉛色の艶を帯びていた。ただ耳の上にかかっている幾筋かの長い白髪は、その昔の硬い髪の面影をとどめ、枯れ残った大王松のひとふさを想わせた。

おまけに歯が抜けていた。犬歯の脇から、ぽっかり暗い口腔が見える。そして、漂白しない和紙のような皮膚には、茶色のしみが薄く浮き出ていた。

森人は、まだ五十かそこらの筈だった。どうしてこんなことが、どうして、こんな、——確かに森人だが、いったいどうして。森人は喋り始めた。

いやあ、夢のようだ。あの雪助が、あの、赤ん坊の雪枝が、あの生意気なおませの雪坊が、あの、男の子みたいに利かん坊の雪之助が、確かに、全く、いったいどうしてこんなことがあり得るのかね。

全く、いや、十一年とはねえ。いや、きみに最後に会ったのは、もっとずっと前だ。死んだ母さんにそっくりだ。いや、不思議なもんだ。全くそっくりだ。何しろ、ぼくらは母さんのうんと若いときの子だ。兄貴はおふくろの十六のときの子だし、ぼくは十七のときの子だ。それも昔風の数えでだ。むかしの女は大人だった。——おかげで、ぼくはおふくろのごく若い頃の顔つきをちゃんと記憶している。もの心ついた頃のおふくろは、花の盛りの、そうだ、ちょうど今の、お前くらいだったろう。

いったいいくつになった。——そうか、二十三か。二十三といえば、昔風に数えれば、二十四か五だ、ぼくが小学校に入る頃のおふくろの年だ。

お前がこうまで母さんに似ていなかったら、とてもわかりゃしなかったさ。何しろ、赤ん坊の雪枝しか知らないんだからね。それなのに、ひと目でわかった。おふくろが近づいて来たみ

たいだった。
森人が自分の変ったことに気づいていて、その弁解を始めないのは、雪枝にとっては救いだった。
あたしが、小学校に入る年だったかしら、森兄さんに最後に会ったのは。
なに、ほんの赤ん坊だった。こまちゃくれた男の子みたいなチビ助だった。
お葬式のことをよく覚えているのよ。あの女の。
ああ。
森人はそれには答えずにべつのことを言った。
雪どけの水で田圃が一面にあふれて畦道も消えて、大きな湖みたいだった。よのみ鳥がはさ木にいっぱい群がっていたのを覚えているかい。あの黒い鳥。
そう、あれはむく鳥だ。よのみ鳥というのは多分むく鳥が榎の木の実をつつくから、榎の実をよの実となまってそう呼んだのだろうと思うよ。
森人は言ってタクシー乗場の方へ歩いて行った。
榎の木ではなくて、むくの木と言っていたわ。
むく鳥たちが集るから、むくの木と言うのかもしれない。どっちにしても、榎の木のたぐいだろう。そういえば、むくえの木というのかな、あれは。
よのみ鳥たちが榎の木に群がると、子供たちはみんな榎の木の下に集って、よのみ鳥たちがついばむ甘い実が、落ちてくるのを受けとめて食べたわ。鳥が梢をゆさぶってくれるので、甘い黒い実が落ちてくるのよ。
それはむくの木だ。黒い実なら。橙色の実のなるのが榎の木だ。お宮の後にあった木が榎の

木で、焼場の後にあったのがむくの木だ。そうか、お前もそんなふうにして拾って食べたのか。おれたちもそうした。

今でも、春の雪どけのころは、蒲原の田圃は大きな湖みたいになるかしら。

さあ、もう長いこと蒲原には帰っていないよ。おふくろの死んだとき帰ったのが最後だ。田圃は戦後、耕地整理をして、灌漑を完璧にしたから、そんなことはないだろう。(戦後——そう、戦争があった、雪枝の知らない戦争が)今ではむかしと違って、川が運んでくる肥料をあてにしなくていい。氾濫の見返りにしては割が合わない。人工的な肥料が普及したからね。

よのみ鳥は今でも来るのかしら。

よのみ鳥はおふくろの葬式のときもいたよ。

あのひとのお葬式のときもいたわ。

よのみ鳥の卵は水色だったわね。

きれいな空の色だ。

雪枝はよのみ鳥の水色の卵を思い出して、毎年アメリカで復活祭(イースター)がめぐってくるたびに、卵を水色に染めて籠に盛った。アメリカには復活祭にゆで卵の殻をいろんな色に染めて、それを叢に隠し、子供たちに探させる風習があった。ジェリイビーンズという、ちょうどよのみ鳥の卵くらいの大きさのお菓子があって、それを小さな卵代りに籠に盛って、子供たちに贈ったりもした。

マーレックはそういうことをするのが好きだった。母親がいたらしてくれるだろうと思うようなことはなんでも好きなのだ。——マーレックは雪枝が週末を一緒に暮している恋人だっ

た。

春になると、――復活祭の頃、水色の卵を生む黒い鳥がいたのよ。わたしの育った村に。

するとマーレックは眼を輝かせて訊く。

黒い鳥が水色の卵を生むの？　黒い鳥はパイの中から出てくるんだと思ったよ。

彼はマザーグースの一節の、おやまあ、これはおどろいた、王様びっくり、黒い鳥、ぴいちく、パイからとびだして、というところを口ずさんだ。

黒い鳥は櫟の木の穴の中から出てくるのよ。田の畦の櫟の木の並木に、刈った稲をかける竿を渡すの。そういう木をはさ木と呼んでいたわ。でも黒い鳥はどこにでも巣をかけたわ。瓦の間だの、戸袋の角だの。黒い鳥は黒い小さな甘い実が大好きなのよ。その黒い甘い実のなる木は天までとどくような大木で、子供たちはのぼれないのだけれど、黒い鳥の群がその木に止って実を食べるとき、木の下で待っていると、甘い黒い実が沢山落ちてくるから、子供たちはそれを拾って食べるのよ。

黒い鳥の群が黒い実のなる大木にとまったら、子供たちもみんな木の下に集まるのかい。

マーレックは少年のように眼を輝かせる。

黒い鳥の群が黒い実のなる木から舞いあがると、夕焼の空が急に暗くなるほどなのよ。

黒い鳥の群が夕焼の火を消しちゃうんだね。

マーレックは都会育ちだったから、そういう話にひどくロマンティックなものを感ずるのだった。

そうよ。黒い鳥は水色の卵しか生まないのよ。

だから、きみは復活祭の卵をブルーにしか染めないんだね。

そうよ、水色は悲しい色なのよ。
きみが水色だ（悲しい）と、ぼくも水色だよ。
マーレックは浮き浮きとして言った。
彼の眼はほんのときたま、深い水の色になることがあるが、それは彼の父親の眼が、それこそ、よのみ鳥の卵のような明かるい水色のだったからだろう。
北方民族の、ブロンドに空色の眼のマーレックの父親は、第二次世界大戦のとき、ポーランドでドイツ兵に殺された。フランス人だったマーレックの母親は、ナチスが侵入するほんの少し前、危くワルシャワを逃れ、その後パリでマーレックを生み落した。
戦争が終ってパリが解放され、連合軍のアメリカ兵たちがやって来たとき、マーレックをかかえて兄の家に厄介になっていたマーレックの母親には、彼らが救いの神に見えた。息子にはスラヴ民族の血が混っているとは言え、ソヴィエト軍に占領されて、わけのわからない鉄のカーテンを重く閉じている死んだ夫の国ポーランドへいまさらのりこんで行く気はしなかった。
彼女は軍神めいて見えたアメリカ軍の将校と結婚して、フランス女たちから軽侮と羨望の眼で見られながら、息子ともどもアメリカへ渡り、それっきりアメリカ人になってしまった。
マーレックは父親の国、ポーランドを一度も見たことがなく、母親の国フランスをほんのちょっとしか覚えていず、今ではすっかりアメリカ人だった。
彼はこの二年ばかり、日本人の雪枝と週末の同棲を続けている。雪枝より十歳以上も年上で、アメリカでは名のあるビール会社の研究所に勤めている。責任のある社会的に認められた地位を持つからには少しぐらい堅苦しくても、正式な結婚が必要だと考えていた。
雪枝は大学を終えたので、ひとまず日本に帰ることにした。卒業してすぐ、いっそのこと結

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook